

**岸井隆幸** 日本大学理工学部特任教授 **浅見泰司** 東京大学大学院工学系研究科教授 **瀬田史彦** 東京大学大学院工学系研究科准教授 **市川宏雄** 明治大学名誉教授  
**吉村有司** 東京大学先端科学技術研究センター特任准教授 **柳川範之** 東京大学大学院経済学研究科教授 **堀田聰子** 慶應義塾大学健康マネジメント科教授

## コロナ禍を通じた変化・認識等について

### 日本全体、世界全体がリモート社会に対してレベルアップ

- ・コロナを契機に日本全体、世界全体がリモート社会に対してレベルアップした。オンラインでの会議など対面に準じたインタラクションは今後も進む。

### 働く場と住まいの場の融合

- ・これから進みそうなことは、働く場と住まいの場の融合の領域を充実させていくことである。

### コロナにおけるウェブの代替性はリアルでの信頼により成立

- ・ウィズコロナでのウェブ代替の動きは、あくまで「再認識と加速化」であり、リアルのコミュニティの財産故にオンラインが成立している。
- ・社会のアクチュアルなつながりを本当にゼロにして止めるわけにはいかない。

### 働く場所にとらわれない住まい方の進化

- ・コロナのインパクトがかなり方向性を左右すると思うが、本当に長い目で見れば、テクノロジーの発達によって住むところと働く場所を分けて考える考え方が進むと考えている。

### 多地域居住への捉え方の変化

- ・多地域居住を数年前から申し上げていたものの、皆に全く実感を持って貰えないでいたが、コロナを契機として割と当たり前のように言われるようになったことは非常に大きな変化だと思う。

### 多摩地域にとっては好機

- ・今回、多摩地域にはプラスに働くものと感じており、都心にあった需要が郊外に移ることで郊外にはプラスに働くものと捉えている。

### リアルな交流の場としてのオフィスの必要性や役割は不変

- ・ウェブとリアルの使い分けが自ずと出てくる。オフィスはコミュニティの存在を確認し、意思決定を行う場であり、リアルの必要性や役割は変わらず続く。

### 東京は場所の価値が高い

- ・オフィスの需要減少によりあいたスペースを、地域の価値を活かして何に転換するかが重要である。

### 三密回避はマイクロレベルの問題

- ・コンパクトシティと三密はスケールが全く異なる。密集市街地でもディスタンスはでき、三密回避はマイクロレベルの問題。

### グローバリゼーションはコロナ後復活・拡大

- ・コロナは一時的なものであり、観光やインバウンドは、コロナが収束すれば復活する。そこに行きたいというニーズはあり、それを掘り起こしていくことが重要。

### アフターコロナに向け如何に経済を戻すかが世界的テーマ

- ・ウィズコロナとアフターコロナは全く異なるという視点が大事。アフターコロナに向け、如何に経済を戻すかが世界的テーマであり、どの都市がいち早く立ち上がるかが勝負となる。

### 国際金融都市を目指す東京にとってチャンス

- ・日本の地政学的な安定が認識され、東京にとってチャンスである。

### コロナ後を見据えた観光都市に向けた準備

- ・コロナ後の外国人観光客が増えてきた時を見据え宿泊施設など受入環境を支える機能・業態を維持し、観光都市として機能するまちづくりが重要である。
- ・東京での大規模都心開発と数多く行われているイベントとをうまく組み合わせ、都市力を上げていくことにより、国際交流創造都市を実現していくことが必要である。

### 高齢者の外出・交流機会の減少に伴う身体・認知機能の低下

- ・感染にかかわる不安から外出・交流、介護サービス利用、受診等を控える傾向。行政やマスメディアの情報が不安を煽る場合もあり、不安軽減につながる情報提供や働きかけの検討が重要。

### ウェブウィルスへの問題意識や備えも重要

- ・様々な動植物を介して入ってくる感染症や、経済のシャットダウンを引き起こし得るウェブウィルスへの問題意識や備えも重要。

## 新たな日常にも対応する都市づくりについて

### 都市において集積は絶対条件

- 集積なくして大都市のパワーをもつといった歴史は恐らくない。グローバルゼーションや都市活動においては、集積は絶対条件である。

### リアルな大切さが再認識

- 2000年代のIT革命など、情報化が進むことにより、益々リアルな良さが認識されることが歴史的に繰り返されており、今回も同様の再認識が起こるだろう。

### 交流スペースの充実・拡大が重要

- リアルな交流を求めて、オフィスの共用空間、共有スペース（IT企業の遊び場のような空間も含めて）の質の充実・拡大は今後も広がってゆく。

### 人中心のまちなかの形成

- 歩行者空間が今後のまちづくりにとって、中心になってくるのではないかと考えている。先進都市で進みつつある道路の歩行者空間化など、人中心のまちの大切さが改めて認識された多地域居住への捉え方の変化。

### オープンスペースの充実を図るべき

- 緑地などのオープンスペースが非常に重要とされており、これまで以上に大きく取り上げていくべき。

### 中小ビルの更新を如何に進めていくかが課題

- 中小ビルの建替えの進め方を真剣に考えていくべき。スタートアップ拠点や住の機能も入ることも考えられる。

### 建築規制等では複合用途への規制の柔軟な対応が必要

- テレワークの普及により、居住機能と仕事場の機能が渾然一体となることから、ステレオタイプに縛られない土地利用規制、建築規制の柔軟な対応について考えていく必要がある。

### 外国人の住やすさは言語と子どもの教育環境

- 一番の課題は、外国人が住みにくい都市であるということ。言語の問題と家族の生活環境を整備することが圧倒的に重要である。

### 快適通勤の実現

- 鉄道会社は危機感を持っているが、混雑率が下がるため、利用者にとっては快適性が上がる。

## デジタル技術の活用について

### データに基づくまちづくり

- データを用いたまちづくりを進めてきたことがバルセロナの特徴。そうした流れを見て日本でも歩行者を中心としたまちづくりが進んでいくと考えていたところ、コロナ禍となり、それを促進した面がある。

### 都市機能の基礎となるデジタルインフラの整備

- 5Gの整備などは都市機能そのものに影響すると思われるため、デジタルインフラがどこまで整備されるかということは大きな話である。

### ICTツールを活用した歩行者空間やパブリックスペース

- 日本においても、個人情報の取扱いなど課題はあるが、ICTツールを活用しながら、データを集めて定量分析した上で、都市の構造的に歩行者空間とした方が小売店の売り上げが上がるなど、都市空間の魅力や多様性を高めていくべきである。

### デジタルプラットフォームを活用した市民参加型の都市政策

- オープンで市民を巻き込んだ討議、熟議をいかにに行い、都市政策につなげていくかがキーポイント。バルセロナ市では市民の多彩な声を集め、皆で議論し具体的に落とし込んでいくオープンソースで創り上げたツールとともに成功した。

### 市民とのディスカッションに基づく長期的ビックピクチャー

- きちんとディスカッションをして作り上げた長期的なビックピクチャーの存在が、スーパーブロックなどバルセロナの先進的な都市づくりの今日までの下地となっており、その青写真があるため、ぶれない。

## 包摂的な都市づくりについて

### 出会うの質・共にする・創る体験の共有が鍵

- 包摂的な都市づくりに向けては、質の高い出会いあるいは生活者としての「出会い直し」、共にいる／する体験、共に創る体験の3ステップが鍵になるのではないかと考えている。

### 楽しさと役割を手がかりにした出かけたくなる仕掛けづくり

- ウェルビーイングを高める観点からも、誰もが出かけたいたところがあり、そこに出かけられるハードとソフトについて、楽しさと役割を手がかりに検討するとよい。

### 地域における困りごとに応え誰もが働ける仕事起こし

- 地域の困りごとに応え、心身・社会経済的なチャレンジがあっても、その人の思いと力を活かして働ける仕事を起こすことが、持続可能な地域づくりにもつながる。